発行日:令和３年１２月吉日　発行人:熱田区いきいき支援センター

あったか熱田

NEWS
〈第12号〉

わたしが 認知症カフェに 参加する理由

“認知症カフェに行くと、認知症だと思われる”名古屋市に認知症カフェが誕生した6年前、地域の人からそんな声が上がった。認知症カフェと名乗らない方がいいのではないか、そんな不安を抱えながら、地道に認知症啓発に取り組み、少しずつ参加者の意識を変えてきたカフェがある。認知症のイメージを変え、地域の人から愛される認知症カフェになった“かなやまカフェ”を紹介する。

金山駅から徒歩7分、桜田公園の南に位置する「介護老人保健施設（老健）かなやま」で、月1回行われていた“かなやまカフェ”。コロナ禍の中で現在開催を見合わせている。老健の入所者や併設するデイケア利用者の安全を考慮して、なかなか再開に踏み切れないのが実情だ（令和3年12月現在）。

かなやまカフェが開設した6年前、担当者からいきいき支援センターに相談があった。「参加者から『認知症カフェに行くと、認知症だと思われるから参加しづらい』と言われた。認知症カフェと名乗らない方がいいのだろうか」

“認知症の人や家族に気軽に参加してもらいたい”“認知症になっても参加し続けられる場所として認知症カフェがある”“地域の人にもっと認知症について理解してもらいたい”。そんな思いを込めて始めた認知症カフェ。

「認知症の人に寄り添っていきたい」参加者の意識が少しずつ変わってきた

担当者は悩んだ末に、開催時に毎回、認知症の豆知識コーナーを行うことにした。音楽の演奏や落語などの楽しい催し物に加え、10分程度の認知症啓発を行うもの。そして、毎回アンケートを実施した。開設して2年ほど経ったころ、担当者がアンケートを見せてくれた。そこには「認知症の人に寄り添っていきたい」等のコメントがあり、担当者は「認知症のイメージが変わってきている」と話した。

認知症豆知識コーナーで啓発

“地域の人にもっと認知症について理解してもらいたい”との思いから、10分間の学習会を盛り込んだ。(開催当時の様子)

認知症になっても変わらず 参加し続けられる認知症カフェ

川端清志さん（84）は4年ほど前、妻とともに福井県から名古屋市熱田区に転居してきた。近所に知り合いもなく、でかける場所は買い物等に限られていた。心配した長女から〝かなやまカフェ〟を紹介された。

参加して4か月経ったころ、かなやまカフェの担当者は、川端さんの妻のもの忘れに気づいた。丁寧に話を聴くなど徐々に信頼関係を築き、いきいき支援センターを紹介。約4か月後、介護保険を申請し、デイケアに通うようになった。

現在、症状は少しずつ進んでいるが、妻が役割をもって生活できるよう、夫の清志さんが優しく声をかけ、料理を一緒に行う等サポートしている。妻のもの忘れにいち早く気づき、夫妻に寄り添い、必要な介護保険サービスを利用し始めたことが、今の穏やかな生活につながっているのかもしれない。

理学療法士が指導する人気の介護予防体操（開催当時）

かなやまカフェの参加者は20～30人。参加者が率先してボランティアをしていることも特徴的だ。身体の不自由な人は受付を行い、家事が得意な人は食器を洗う。動ける人は机やいすを片づけ、認知症のある人は周りに倣って手伝いをする。

地域の人の認知症に対する意識は、コロナ禍の間に少し逆戻りしたかもしれない。しかし、かなやまカフェが再開すれば、また時計の針を進めてくれるのではないだろうか。「再開したらまた妻と一緒に行きたい」（清志さん）。認知症になっても変わらず参加し続けられる〝かなやまカフェ〟は地域の人から頼りになる居場所として愛されている。

かなやまカフェ

高蔵学区　☎883－0080

- 実施日：毎月第２日曜　10時-12時
- 場所：介護老人保健施設かなやま（桜田町9-3）
- 参加費200円

※新型コロナウイルス感染防止のため、現在休止中、再開未定。

認知症の方が住み慣れた地域で
自立した生活ができるよう、
仲間づくりや生きがい支援、
介護する家族の負担軽減、
認知症状の悪化予防、
地域住民への啓発等を目的として、
誰もが集まることができる居場所が
『認知症カフェ』です。

熱田区いきいき支援センター（本センター）☎ 671-3195　FAX 671-1155
（分室）☎ 682-2522　FAX 682-2505